

# 愛媛大学医学部 同窓会会報

2017 NOVEMBER No.33

発行日／平成29年11月1日

編集発行人／薬師神 芳洋

発行／愛媛大学医学部同窓会

〒791-0295

愛媛県東温市志津川

TEL(089)960-5989

印刷／太陽印刷株式会社

TEL(089)932-2881



## 表紙紹介

### 愛媛大学医学祭

平成29年5月21日・22日開催

今年の医学祭のテーマは「Will」です。

このテーマは、「意志」と「未来」の二つの意味が込められています。

## CONTENTS

前会長挨拶	2
新会長挨拶	3
卒業生からのメッセージ	4
医学部医学科人事異動	6
活躍する卒業生	7
愛媛大学医学部同窓会会則	8
愛媛大学医学部同窓会会則施行細則	9
愛媛大学医学部同窓会 申し合わせ事項	9
座談会	10
退官教授からのメッセージ	12
医学祭を終えて	13
海外医療研修に参加して	14
第69回西日本医科学生体育大会 愛媛大学総合優勝!!	15
同窓会報告	16
支部紹介	17
第33回通常総会報告	18
愛媛大学医学部 キャンパスマップ	19
愛媛大学医学部支援基金について	19
お知らせ	20

## 前会長挨拶



高田 清式 (昭和56年卒・3期生)

今年度は全国的に類まれなる台風や豪雨が夏から秋に続きましたが皆様お変わりございませんでしょうか。わが国近隣諸国との防衛問題、国会・地方議員の不祥事、今治の加計学園獣医学部問題など話題はつきませんが、現在、当愛媛県は「愛顔つなぐえひめ国体」が始まっており賑わっています。また、国体主催のこの年、今年度の西日本医科学生総合体育大会（西医体）ではわが愛媛大学医学部が（創設来初めての）総合優勝の栄誉を獲得しました（西医体のホームページ<http://plaza.umin.ac.jp/~nisiitai/69th/>などご覧願います）。文武両道として、ぜひ国家試験にも期待しております（昨年度は4年生時のCBTは全国平均以上、OSCEは全国トップクラスの成績でした）。

さて昭和48年に創設されたわが愛媛大学医学部は、さらなる発展を目指し44周年目になり、この3月には第39期生が学窓を巣立ち（医師国家試験の今年の合格率は88.0%で国立大学平均90.8%に比し残念ながら昨年同様不振、次回捲土重来を期待）、国内外のそれぞれの医療現場で会員の皆様が毎年積極的な活躍を行ってられます。益々の会員皆さまのご活躍を期待しております。

大学の近況としては、教育面では「地域特別枠自己推薦（推薦B）」での平成21年度から導入された奨学生枠の入学者が専攻医（3年目）になり（初期は定員10名、現在は昨春から20名）目下県内の各病院にて研鑽を積んでおります。また、地域医療に従事する医師確保を目的に平成24年4月に開設された地域医療支援センターも（県の委託）軌道に乗りつつありますが、新たに地域医療を担う寄附講座として、昨年の西条地区に地域消化器免疫医療学講座、松山地区に地域小児保健医療学講座の開設に続き、今年度は救急航空医療学講座を開設しドクターヘリにて愛媛の救急医療体制の構築・充実を目指しております。愛媛大学医学部創設時の大きな使命である地域医療の充実がさらに発展することを期待しています。また、国際グローバル化・国際認証に対し（来秋に認証評価受審予定）、臨床実習の充実等を当大学病院の各診療科とともに県内の各病院での臨床実習も質量の点で充実させつつあります（1昨年度から臨床実習後のPCC-OSCEも実施）。また昨年度から韓国の医学生を臨床実習に受け入れていますが、今年度は当医学部からも、韓国、ネパール、米国、ザンビア、スペインなどに約1～4週間の医学・医療留学を9人の医学生が経験いたしました。また、良き伝統行事になった第7回目の白衣授与式を本年4月27日に全5年生に（臨床実習開始前）厳かに挙行了しました（医学部や総合臨床研修センターのホームページをご参照ください）。なお、昨年度から卒業試験は、国家試験同様のMCQ形式に変わり計400問で行っていますが、今年も11月に行う予定です（再試験あり）。

さて、わが同窓会としても、医学部の発展のためにより多く寄与できるように今後も様々な面で頑張る所存ですので何卒宜しく願い申し上げます。延期されていた新たな専門研修が来年度から開始されるにあたり、遠方の会員の皆様に大学をよく知っていただくことを目的に、私ども附属病院総合臨床研修センターが毎年作製しております「専門研修案内」を、三浦現病院長とも相談し今年も会員の皆様に同封し配布いたします。大学病院の近況のご理解にさらに役立てば幸甚です。ところで、私は18年間同窓会会長を務めて参りましたが、今年5月から薬師神芳洋君にバトンタッチいたしました。私自身、昭和57年の同窓会創設から関わらせてもらい、今までサポート・叱咤激励をいただき深謝申し上げます。

また、昨年同封しお願いいたしました、教育環境の充実のための医学部支援基金寄付金に多くのご支援をいただき有難うございました。継続した支援寄付金であり、引き続きこれからも何卒宜しく願い申し上げます。わが医学部は創設50周年を数年後に迎えるところですが、ぜひ今まで以上に会員皆様の益々の支援・励ましなど引き続き何卒宜しく願い申し上げます。最後になりましたがこの激動の年、皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

# 新会長挨拶



「宜しくお願いします」

**薬師神 芳洋** (昭和 63 年卒・10 期生)

愛媛大学同窓会会員の皆様。この度、高田前同窓会会長の後任に推挙されました、愛媛大学臨床腫瘍学講座の薬師神（芳洋）と申します。

私は1988年（昭和63年）に愛媛大学医学部を卒業し、旧第1内科（小林譲教授）、松山日赤病院内科、を経て愛媛大学大学院に入学。その後卒業・留学を経て再度大学に戻り、旧第1内科、新設の附属病院腫瘍センター・臨床腫瘍学講座の開設に携わり、現在に至っております。会員の皆様の懇親、そして愛媛大学医学部同窓会の発展の為、微力ながら尽力致す所存です。どうか宜しくお願い致します。

さて、会員皆様はこの同窓会について、どの程度ご記憶でしょうか？例えば、歴代の会長のお名前が挙がるでしょうか？ 私の記憶も定かで無い事から、調べてみました。

- 昭和57年 愛媛大学医学部同窓会発足
- 昭和60年 朴信正先生（初代会長）
- 昭和62年 櫃本泰雄先生（第2代会長）
- 平成3年 鳥居本美先生（第3代会長）
- 平成5年 西尾俊治先生（第4代会長）
- 平成11年 高田清式先生（第5代会長）
- 平成29年 薬師神芳洋（第6代会長）

と言う変遷です。高田清式先生におかれましては、18年間の長きに渡り会長をお勤めに成り、愛媛大学の顔とも言える存在です。私の様なものが後を引き継いで良いものか少々不安ではあります。一方で、私の使命は、同窓会がより皆様の身近なものになり、会員の皆様がより参加し易い会にする事ではないか、と感じています。副会長の時代から、会員の皆様と同窓会には少し距離があるように私は感じていました。

そこで、まずは同窓会の規約を総会を通じて変えさせて頂こうと思っています。同窓会会長の任期は3年2期までとし、役員に関しては人数を規定したうえで任期制とし、出来れば、各支部の責任者が役員に入るような体制が出来ないものかと考えています。また、同窓会総会の充実と同窓会誌の充実も必要と考えます。この計画実現出来るか、会員の皆様のご協力が是非とも必要です。どうか宜しくお願い致します。

まずは、今年から同窓会誌の内容を少し変えました。今年は、愛媛大学医学部長（満田先生）、病院長（三浦先生）に加え、我々が高田前同窓会会長を交えた座談会を計画しました。これまでの愛媛大学医学部とこれからの医学部を語って頂こうと思っています。また、新任教員のご挨拶に加え、本年度大学を後にされる先生方のご挨拶、全国で活躍されている卒業生のレポート（新城憲先生、高梨秀一郎先生）等を新たに加えました。少し印象が変わった同窓会誌をお楽しみください。

さて、愛媛大学医学部創立50周年が迫っています。この時多くの会員の皆様にお会い出来る事を楽しみにしておりますと同時に、この同窓会が会員の皆様の心のよりどころになるように、そして何よりも楽しい会になるよう努力致します。

どうか皆様お力をお貸しください。

平成29年（2017年）11月  
第6代同窓会会長 薬師神 芳洋

## 〈歴代同窓会会長〉

年 度	会 長
S57	朴 信正
S58	朴 信正
S59	朴 信正
S60	朴 信正
S61	朴 信正
S62	朴 信正
S62	櫃本 泰雄
S63	櫃本 泰雄
H 1	櫃本 泰雄
H 2	櫃本 泰雄
H 3	鳥居 本美
H 4	鳥居 本美
H 5	西尾 俊治
H 6	西尾 俊治
H 7	西尾 俊治
H 8	西尾 俊治
H 9	西尾 俊治
H10	西尾 俊治
H11	高田 清式
H12	高田 清式
H13	高田 清式
H14	高田 清式
H15	高田 清式
H16	高田 清式
H17	高田 清式
H18	高田 清式
H19	高田 清式
H20	高田 清式
H21	高田 清式
H22	高田 清式
H23	高田 清式
H24	高田 清式
H25	高田 清式
H26	高田 清式
H27	高田 清式
H28	高田 清式
H29	薬師神芳洋



## 大蔵 隆文 (昭和61年卒・8期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域救急医療学 教授)

平成29年4月より地域救急医療学講座の教授に就任しました大蔵隆文と申します。1986年愛媛大学医学部卒業の8期生です。卒業後、愛媛大学医学部第二内科に入局し、松山赤十字病院、宇和島社会保険病院(現在のJCHO 宇和島病院)で初期及び後期研修を行いました。1990年より愛媛大学第二内科に戻り、現在専門にしている高血圧に関する基礎及び臨床研究を行いました。1993年から2年間米国テキサス大学ヒューストン校に留学させていただき、アポトーシスに関する基礎研究を行うことができ、自身の視野を広げることができたと共に、帰国後の大学院生の指導に大いに役立ちました。また、臨床的には愛媛大学第二内科は、現在の講座名である循環器・呼吸器・腎臓高血圧を専門としており、幅広い領域の臨床経験を積むことができました。

地域救急医療学講座は、2010年に愛媛県の寄付講座として開設されました。八幡浜・大洲圏域では新臨床研修医制度の施行後から医師不足が深刻化し、八幡浜市の唯一の二次救急医療機関である市立八幡浜総合病院でも勤務医の減少から診療機能が低下し、特に救急医療に関しては、地域住民のニーズに応えられない状況となりました。そこで愛媛県が八幡浜・大洲圏域を地域医療再生計画の対象地域とし、愛媛大学医学系研究科に地域救急医療講座を設立しました。そして2016年からは八幡浜市の寄付講座として引き継がれています。本講座は市立八幡浜総合病院内に地域サテライトセンターを置き地域医療を支援すると同時に、地域救急医療に従事する医師の養成、医学生・研修医の教育・指導、地域救急医療向上のためのシステムの研究・開発を行っています。現在本講座は、3名の内科医師と1名の小児科医師で構成されています。私自身は市立八幡浜病院において、通常の診療に加え、常勤医師との意見交換、循環器を中心とした救急医療を行っています。現在、市立八幡浜病院で研修や実習する研修医や医学生は多くありませんが、本講座や市立八幡浜病院の地域医療への取組みの結果、市立八幡浜病院の医師数が徐々にではありますが、増加していることを嬉しく思っています。しかしながら、救急医療体制が確立された状況には程遠く、さらなる充実が必要と考えています。そして将来的には、高齢者の多い八幡浜地区で、地域の保健師さんと協力し、救急搬送に至らないような予防医療の仕組みづくりができればと考えています。

最後になりましたが、本講座は一つの臓器を専門にする医師で構成された講座ではありませんので、同窓会の先生方のご支援無くしては成り立たない講座と考えます。何卒、今後ともご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



## 松原 圭一 (昭和63年卒・10期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域小児・周産期学 教授)

平成29年4月1日付けで、愛媛大学大学院医学系研究科地域小児・周産期学講座の教授に就任しました。愛媛大学医学科の10期生になります。昭和63年に卒業後、愛媛大学附属病院で研修し、その後、大学院に進学して研究を行いました。平成13年にはWisconsin大学Madison校にてVisiting Assistant Professorとして大学院の学生指導なども行いました。最も長く勤務しているのは大学病院ですが、それ以外に、野村・新居浜・八幡浜・松山など様々なタイプの病院で勤務してきました。この様な経験が私に愛媛県における地域周産期医療について考えさせるきっかけになりました。今まで、職歴の上では様々な岐路がありましたが、結局は大きな流れに乗って今まで産婦人科医として、また、研究者として働いてきました。不思議と今までの人生に幾ばくの後悔も持たないで居られる今の自分は幸せだなと思っています。自分の信念として、「後悔は自分の人生をつまらなくする。」との想いから、「常に前を向いていれば幸せな人生を歩むことができる。」と今も強く信じて暮らしています。

専門は周産期分野であり、超音波検査による出生前診断などに邁進して参りました。特に大学院時代以降では妊娠高血圧症候群を専門として研究を行ってきました。妊娠高血圧症候群の病態に関する研究は今も続いています。周産期医療は未だ解明されていない領域が多く、科学の及ばない、勘に頼る部分が多々あることから、これからも様々な研究によってより科学的な周産期医療を目指す必要があります。周産期以外では、腹腔鏡手術に長く関わってきました。愛媛大学の腹腔鏡手術は、電気メスもない黎明期の腹腔鏡検査に始まり、今や、広汎子宮全摘術を腹腔鏡で行う時代になりました。

愛媛県での周産期医療における最大の問題は医師不足です。大学病院や県立中央病院といった大きな施設ですら人手不足にあえいでいるのが現状です。それ以外の地域では更に深刻な問題です。私の役割は、まず、現状の人手不足に対してできる限りこの手を貸していくこと。そして、産婦人科学教室とともに若手医師の勧誘に勤しみ、医師の量的拡充を図るとともに、愛媛県で働く産婦人科医・助産師のスキルアップに努めることで質的な向上も図っていくことです。

愛媛大学は開学後45年を経過し、多くの医師を輩出してきました。近年では医学科地域特別卒自推薦入試によって、より地域に根ざした多くの若手医師を輩出していくものと考えられます。その時、愛媛大学医学部の卒業生はもっと、大学のために働いていくべきですし、そのために皆が満足できる職場が与えられる必要があると考えます。今後、ますます、愛媛大学の同窓生が愛媛県の医療を盛り上げていくことを願っています。



**佐藤 格夫** (平成7年卒・17期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 救急航空医療学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆さま、17期生の佐藤格夫と申します。平成29年4月1日付けで、救急航空医療学の教授を拝命しました。平成7年に卒業後に、日本医科大学救急医学教室に入局し、救急医、外科医、集中治療医としての研修を積みました。今では考えられない労働環境になりますが、2年間で土日を含んだ6日間の休みを与えてくれた外科病院での研修も含まれています。忙しい激務の中での外科手術、集中治療の生活を続けているときに、平成14年から、米国テキサス州テキサス大学ヒューストン校外科学に4年間留学をする機会を頂きました。米国の外傷センターの症例数の多さと文化の違いに身をもって感じた次第です。米国で行った侵襲期における栄養代謝に関する基礎研究に縁があり、帰国後は日本医科大学高度救命救急センターで、ICUにおける臨床栄養の実践に看護師らと一緒にNSTとしてチーム医療をたちあげました。米国での症例数の多さ、若手への教育理念の違いを通じて、帰国後は若手医師の育成にも積極的にかかわるようになりました。国内では先駆的になりますが、海外で行われていたご猷体や生体動物を用いた外傷手術修練に積極的に関わってきました。平成23年1月1日より京都大学初期診療・救急科での勤務を通じて、私立大学と異なる国立大学での勤務をする縁を頂きました。日本医科大学で普通に行われていたことが京都大学では異なり、それぞれに一長一短があることにも気づきました。京都大学医学部附属病院における救急医療に関して、周囲との調和を大切にしながらゆっくりとではありますが推進をしてきました。医局を超えた京都での救急連携のみならず全国における若手医師との交流などを手掛けるようになりました。基礎研究においては京都大学農学部との共同研究を通じて、日本医科大学救急医学の大学院生を国内留学へと導き侵襲期における栄養代謝学の研究も並行して行ってきました。

さて、愛媛県では厳しい救急医療の現状から、愛媛県を事業主体、県立中央病院を基地病院、愛媛大学医学部附属病院を基幹連携病院とし、ドクターヘリコプター事業を支援する「救急航空医療学講座」を設置する動きがありました。愛媛県を卒業と同時に飛び出した身分ではありますが、愛媛県、四国の救急医療は常に気にしていました。愛媛県、四国の救急医療への関わりに少しでも貢献できるのではとの強い想いで母校へ帰学させて頂きました。愛媛県内の病院連携、消防救急や行政との連携を通じて、ドクターヘリの活用が愛媛県全体、四国全体に本当の意味で活用できるようにしていきたい所存であります。特に医局という枠を超えた救急連携、職種を超えた若手の育成という理念を大切にしながら若者の夢と一緒に育てる機会を得たいと考えています。同窓の諸先生方には様々な面でご指導ご鞭撻を賜わりたく存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。



**大石 久史** (平成8年卒・18期生)

(名古屋市立大学大学院医学研究科 病態モデル医学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、医学科18期生の大石久史と申します。平成28年11月から、名古屋市立大学大学院医学研究科に所属しております。専門は実験動物学で、病態モデル医学分野と実験動物研究教育センターを担当しております。

私は、松山東高校卒業後、平成2年に愛媛大学に入学致しました。大学時代はバドミントン部に所属し、1回戦、2回戦負けが常でしたが、仲間と楽しくやれたのは良い思い出です。卒業後、整形外科教室に入局し、柴田大法先生、藤井充先生に師事して医師のいろはを教えて頂きました。大学院では、病理学の能勢真人先生の下、自己免疫疾患モデルマウスを用いた研究を行いました。修了後は整形外科に戻る予定でしたが、卒業間際に、筑波大学生命科学動物資源センター、高橋智先生から博士研究員のお誘いがあり、大学院時代の不勉強を取り戻したいという気持ちで異動しました。1、2年で成果を出して帰局したいと勝手に考えておりましたが、なかなか結果が出ず、帰局のタイミングを逸してしまい現在に至ります。ただ幸運なことに、そのセンターが、日本有数の遺伝子改変マウスの作製拠点に発展する時期と一致したため、その作製法や表現系解析を学ぶ幸運に恵まれ、それ以降、実験動物学に深く関わることとなりました。

現在、ゲノム編集技術が広く普及し、それによる遺伝子改変動物の作製は、生命科学の進歩には欠かせないものとなりました。ここ名古屋市立大学では、大学全体の適切な動物実験への貢献に加え、ゲノム編集技術を応用して高品質な遺伝子改変マウスを提供すること、さらに動物実験学を通じた国際交流活動加速化の3点を主に行っています。

耳鼻咽喉科の村上信五先生、岐阜大病理の宮崎龍彦先生を始め同窓の先生方には、本当にお世話になっております。また、時に同窓の先生のご活躍や現役学生のニュースに触れ、とても嬉しく感じております。私自身、非力ではございますが、母校の更なるプレゼンスの向上に貢献する所存です。同窓会の諸先生方には、一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

# 卒業生からのメッセージ



## 瀬川 篤記 (平成12年卒・22期生)

(群馬県立県民健康科学大学大学院 診療放射線学研究科 教授)

愛媛大学医学部医学科22期の瀬川篤記です。病理診断学を専門としております。平成28年10月1日付で群馬県立県民健康科学大学大学院診療放射線学研究科教授を拝命した旨、同窓会員の皆様にご報告する誌面を与えられ、誠に幸いです。私は大阪の出身で、航空会社の運航部門に7年勤務の後29歳で愛大へ入学、妻と2歳の娘が既にあり、学生生活はバイトと奨学金獲得工作に明け暮れる日々、同期と楽しく過ごす機会は限られましたが、3年の学年末に長男が生まれた際に多くの方々からお祝いしていただいた思い出等、私の脳内に今もカラー画像で保存されています。(その長男、おかげ様で今年成人式を迎えました)

平成12年に愛媛大学泌尿器科学教室へ入局し、6月から松山市民病院へ配属されました。残念ながら自覚していたよりも重篤な不器用さが露呈し、市民病院では多くの機会を与えられながら、瀬川を何とかしようとする指導してくださる先輩方、さらには患者さんに迷惑をかけ続ける毎日となりました。

「俺は生きた人間に針や刃をあてない方がいいな・・・」

そう考え始めたところ、幸運にも群馬大学病理学第二教室(現在は病理診断学と改称)に助手として採用され、平成13年、あの芸予地震の数日後、お世話になりっ放しのまま愛媛を離れました。(芸予地震の時、私は「いよてつごう」(今は高島屋だとか・・・)で群馬への土産を選定中でした)その後、師匠(と私は思っている)小山徹也先生に付いて回る感じで獨協医大へ転職、小山先生の群馬大教授就任により再び群馬大へ移籍、と動きつつ病理専門医や博士号を取得、このたび非常勤で講義を担当していた県立大から常勤のお誘いを頂戴し、教授を拝命するはこびとなりました。

新天地の県立大は看護学部と診療放射線学部の2学部のみ、学生数は大学院生も含め全学で約500名と小規模ながら、診療放射線技師国試合格率は毎年上位、昨年度は学年全員合格を達成しており、北海道から沖縄まで全国から学生が集まります。医師教員が全学で私のみのため病理だけを扱うことはできず、画像から法規・倫理、果ては苦手の基本手技まで何でも来いで、日々奮闘中です。研究では、設備面等から病理は非現実的であり、今は医療安全や多職種連携に着目しています。旅客機運航に関わった20年以上も前の経験が、ここに来て微妙に役立ちそうで、少し楽しみです。

愛媛を離れて早16年。でも実は、私の胃がん検診を担当してくださる内視鏡医が愛大11期の小野里康博先生だったり、狭いこの業界、どこかでちゃんと繋がると感じます。末筆で甚だ失礼ながら、道半ばで逝った松山さんと小森先生に思いを馳せ、同窓会員皆様の益々のご清栄を祈念しつつ、瀬川からのご挨拶とさせていただきます。

## 新米クリニック経営者のドバイ診療記

— 「ハラハラ・ドキドキ」から「ワクワク・ドキドキ」への転換点—

## 新城 憲 (6期生)

(医療法人こころ満足会 形成外科KC 理事長・院長  
沖縄県那覇市久茂地2-2-2 タイムスビル6階)

愛大医学部同窓会の皆様、6期生の新城憲(あらしろけん)と申します。この度、愛媛大学同窓会誌へ卒後の近況報告の依頼がありました。小生の一風変わった生き方を文章にしてみました。私は、1984年に卒業し、沖縄県立中部病院での外科研修を終え、母校の大塚壽先生率いる形成外科診療班のもとで、形成外科専門医資格を取得しました。1994年に沖縄県立中部病院に戻り、形成・再建外科医として公務員生活を続け、2007年6月に形成・美容外科クリニックを那覇市にオープンしました。

開業後は、クリニック経営者として10余名の職員をまとめて一つの方向に導くことの難しさに、経験したことのない落胆とストレスを感じました。そんな中、クリニックのマネジャーでもある妻は、2008年8月に中東、アラブ首長国連邦(以下UAE)のドバイに足を運び、なんと私がドバイで仕事をするための情報を収集していたのです。帰国後、妻のビジョンを耳にし、新米経営者が“ハラハラ・ドキドキ”の毎日で、いまだ経営的にも厳しい状態なのに、「どうしてドバイなの?」と正直思いました。ただ、妻の先見の明に、一目も二目も置く私は、まずはその話に乗ってみようと思い、当地の医師免許取得に向けて準備を始めました。日本の医師免許と学位を有するものは、当地の医師免許証を得るための学力試験は免除されますが、その代わり膨大で煩雑な申請手続きと現地での面接試験が必要でした。

紆余曲折を経て、2009年7月に初めてドバイを訪れ、UAE保健省とドバイ保健局が指定した面接試験を2度受け合格し、UAE全域の公立病院とドバイ全域(医療特区を除く)のあらゆる病院での勤務ないし開業が可能となりました。その間に、事前にインターネットで調べて、面会の約束をとったドバイ在のクリニックを3軒訪問しました。幸運にもドバイで二つのクリニックを経営する医師に出会い、彼が日本から来た、見ず知らずの私にドバイで診療する手順を具体的に提示してくれました。ドバイの就労ビザを取得するためには、後見人となる雇用主の証明が必要ですが、彼は快くその役目も引き受けてくれました。そして2011年4月に、晴れて当地の医師免許証と就労ビザを得ることができたのです。

この計画を考えた当初は、オイルマネーで潤う中東のドバイで手術をしてクリニックの経営にも貢献できればと、正直考えていました。しかし、現実がそれほど甘くないことは程なくわかりました。途中、挫折しかけた意思を支えたのは、いろいろな夢を持った人々を引きつけるドバイという土地にいるときの“ワクワク・ドキドキ”感でした。この砂漠の地に、世界一のビル、ショッピングモール、港湾、人工島、噴水、人工スキー場などを創造し、さらに金融・流通・交通・観光・医療のハブとなって安定成長する国を創ろうとする人間の叡智と努力に、訪問するたびに感動し、生きる力をもらいます。

“ハラハラ・ドキドキ”の新米経営者だった私が、“ワクワク・ドキドキ”の形成・美容外科医へと変わっていき、いつしかクリニックの経営もスタッフとの関係も良好になりました。その転換点が、ここドバイの地に降り立ったことであつたのは間違いありません。

ドバイで診療を始めて6年、通算30回沖縄からドバイへの通勤・滞在となりました。地道に継続することで、多くの貴重な人のつながりができました。現在、当地で私がライフワークとしている乳房再建手術のセンターを設立する話があり、他の日本人形成外科医とも協力して、現実のものにしたいと考えています。



クリニック・スタッフとともに、国籍は10ヵ国  
(著者：後列右)



ドバイの幹線「シェイク・ザイド・ロード」とビル群



## ある一人の心臓外科医から後輩に贈る

**高梨 秀一郎** (6期生)

(榊原記念病院 副院長 心臓血管外科 主任部長)

さて、そろそろ上がりに近づいた、しかし未だ現状に満足していない一人の外科医として後輩に伝えられることは何か、そして、それを考える前に自分がどうして外科医としてここにいるのか振り返ってみた。

今でこそ、自分は心臓外科医でござい、と称してはいるが、どの程度心臓外科医に思い入れがあったかという、はなはだこころもとない。今も思い出すが同業であった父親をみるにつけ、このままでは自分はまともな社会人として、現代の競争社会を生き残っていくことは到底難しい、これは頑張って医者になるしかない。そんないわば追いつめられたような思いが医学部に入る最も大きな動機だったような気がする。

結論を先延ばしにするかのように心臓外科の世界に入ってから、いつ一般外科に変わろうか、いつ内科に転向しようか、と最初の頃はこの閉塞感のある世界から足を洗うことばかり考えていた。だからこそことあるごとにドロップアウトの誘惑に負けそうにもなった。その時、支えになったのは自分の不器用なまでの諦めな心であった。こう言えば聞こえはいいが、実は行動を起こすことが面倒であっただけかもしれない。

先を見通せない、計算高くない無骨な生き方、それは心臓外科医ではなかった父が教えてくれた、心臓外科医にとって最も大切な資質であつたらうと思う。

一流の心臓外科医に求められること、それは「ここは誰にも負けないぞ」という得意分野を持つこと、それによって得られる循環器内科医の信頼が重要なことだと思う。

良い手術をするために必要なこと、それは外科医としての優れた腕、的確な判断力、必要な知識、確かな情報を得ることは当たり前のことであり、手術をすすめていくうえで最も大事なことは想像力、そして良い手術をみて真似する力と自分の型にあてはめ修正する力であらうと思う。

その先には、ひょっとしたら自分だけの新しい術式を生み出し、歴史に名を刻むようなことが起きるかもしれない。



# 医学部、附属病院、そして同窓会、これからの50年に向けて

## <薬師神>

まず、赴任当時の状況や、その後の変化について伺っていきます。満田先生は大阪大学にいらっしゃったんですね。

## <満田>

そうです。今では愛媛で過ごした方が長く、第二の故郷のように思っています。愛媛大学は都会の大学とは少し異なる「ゆとり」があります。周囲の田園風景などもあいまって田舎特有の、少し穏やかでのんびりした時間が流れていたように思います。当時は独立法人になる前ということもあり、教職員側にも時間的・人間的ゆとりがあったのだと思います。一方で、医師国家試験で大量の不合格者をだしてしまい、その対策として「基礎医学展望」の新設、集中講義形式を中心とした新カリキュラム、6年生専用の学習棟の建築などの教育改革が行われ、合格率が格段に上がった時期でもありました。

その後、独立法人となり、医学部においては初期研修が義務化されました。これを契機として基礎医学系の大学院生や臨床系の研究生が激減し、存亡の危機に。ここでも、基礎医学系と臨床系がタイアップして共同研究するなど新たな方向性をうちだし、難関を越えました。法人化によって大学全体の経営が厳しくなったものの、医学部や附属病院は国の予算による施設の耐震工事や大型研究機器の導入などが積極的に行えました。現在も大学経営は厳しい状態が続いています。ただ当院に限っては、様々な財源の創出を行い、同窓会の支援もあり、自立した運営ができるめどが立ちつつあるのではないのでしょうか。

## <薬師神>

私も、それは感じます。三浦先生はどうでしたか。

## <三浦>

初めて通勤したときの印象が強く残っています。それまで九州大学という、商業地域にある大学だったので、田園地帯の中に突如現れた白亜の建物には、全く違う印象を覚え驚きました。また、自分の教室をどのように作るかで非常に苦心しました。一年ほどで徐々に自分カラーを出すことができ、理想とする教室に近づきました。教授会の方々に、暖かく迎え入れていただいたことも大きかったです。学生は非常に大人しく、授業中の反応も薄く(笑)、質疑についても積極的にする学生は少ない印象を受けました。

## <薬師神>

今もそういった学生は見かけますね。病院長に任命されてからはどうでしょう。

## <三浦>

病院長を拝命してからは、もうすぐ3年です。病院の手術件数一つとっても、着実に右肩上がりに増加しています。各診療科で特色を出し、外科分野では先進的な手術、例えばdaVinci(内視鏡手術支援ロボット)を使った手術への取り組み、心臓カテーテルなどの手術が増えたり、先生方の頑張りが数値としても具体的に現れ始めています。赴任当初は少なかった外科系の入局者も増えつつあり、小児外科や産婦人科などでは、特に女性医師の外科系志望学生が増えていて、非常にいい傾向だと思っています。

## <高田>

私も女子学生の増加は、大きな変化だと感じます。私が医学生だった頃は1割以下でしたが、今では三分の一以上が女性になってきました。この傾向は続くのではないのでしょうか。

## <薬師神>

愛媛大学でも女性医師が増え、活躍してくださっていますよね。高田先生も大阪から来られたんですね。

## <高田>

私が愛媛に来てから42年、人生の半分以上を愛媛で暮らしてきました。当初は、三浦先生がおっしゃられたように、田んぼの中にポツンとあるだけ。その後、愛媛大学南口駅(横河原線)ができたり、建物が増築され、当時の印象とは全く違う風景になりました。

## <薬師神>

同窓会の会長時代はいかがでしたか？

## <高田>

会長をしていて一番のターニングポイントだと感じたのは、臨床研修制度が変わったことです。それまでは7割以上の学生が愛媛大学に残っていました。制度変更後は、県内外の病院に分散し、同窓会の名簿作成さえ非常に困難な作業となりました。異動が不定期・複雑で、瞬く間に卒業生の住所が分からなくなりました。それらを防ぐためにも、横山病院長時代から同窓会報を専門医研修案内と一緒に送付しました。その成果もあり、同窓会に戻ってくださる方もいて、同窓会員の把握も同窓会名簿も進みました。

## <薬師神>

われわれが学生の頃とは比べ物にならないくらい女子学生が増えたのは嬉しいことです。次に、将来に向かっての展望や目標を満田先生からお願いします。



同窓会前会長 高田清式



医学部長 満田憲昭

### <満田>

短期的に期待しているのは、国家試験の新卒者全員合格です。愛媛大学医学部は、まだ一度も達成したことがありません。この目で歴史的瞬間を見てみたいという気持ちはあります。長期的には、卒業生のGlocalな活躍。教育・研究・医療の場において、国際的に通用する医学部と、地域の発展を支える医学部の両立を目指したいと思っています。

今の医学部には、世代交代の波が迫り、今後6年間で約半数の教授が交代していきます。教授が交代すれば講座のカラーも変わり、多数の講座のカラーが変われば、医学部のカラーも変わります。この波にうまく乗り、若い世代に愛媛大学医学部の未来を託したいと思います。そして、いずれ必ずやってくる激動の時代に備え、たくさんの可能性や選択肢を残し、未来を託せるような若い人財を早急に育成したいです。



病院長 三浦裕正

### <三浦>

何よりも病院経営の安定化ということが、病院長である私にとっては最重要課題です。病院の経営がうまくいかないと、大学全体に影響を及ぼします。今は堅調に推移していますが、2018年には診療報酬と介護報酬のダブル改定、2019年には消費税10%と、かなり厳しい状況が来ると予想しています。また、特定の診療科における超過勤務も深刻な事態です。若手職員が中心となった「病院経営企画プロジェクトチーム」と「経営改善タスクフォース」が協力して、様々な対策を立案しています。本当に、医師や看護師、コ・メディカルや職員の皆さんには頑張っていただいています。研究面でも臨床面でも、中四国の大学の中で非常に存在感のある大学になり、分野によってはリードできていることは嬉しいですね。

### <薬師神>

そうですね、今後もリードする分野を1つでも増やしていきたいです。高田先生はどのようにお考えですか。

### <高田>

教育・研究・医療の三本柱を維持できる愛媛大学であってほしいし、それを大事にしてほしいと思います。愛媛大学では様々な変化がありました。今も大きな変化を必要とされています。今こそ医学部や附属病院が一丸となって、ひとつの方向へ向かっていく時期だと思っています。

私は教育分野にいたので、これからも愛媛の医療を担ってくれる若い人の育成を進めていきます。立場上、学会や講演会で後輩の同窓生に会う機会が多々あります。その際には、「各学会で愛媛大学がどのような発表をしているか」「最近の動きは」といった言葉をもらいます。何年も愛媛から遠く離れた場所においても、愛媛大学を常に気に掛けてもらってます。また、愛媛大学医学部には全国から学生が集まります。他県からの学生を、温かい心で迎え入れている大学です。このアットホームさを大事にしなが、ますます発展してくれることを期待しています。

### <薬師神>

愛媛大学特有の雰囲気については、皆さんおっしゃっていた、地域に根ざした温かい雰囲気を大事にしたいですね。最後に、今後、学生や同窓生に望むことをお聞かせください。

### <満田>

医学生にはいい意味での「愛校心」、卒業生にはいい意味での「母校愛・誇り」をもっていただきたいです。いい意味で、というのは学閥を作れということではありません。学閥のようなナショナリズムは決していい結果になりません。医学生は、社会から「将来世のため人のために働く立派な人である」と思われていることを自分で自覚し、真摯な態度で勉学に励んでほしいと思っています。卒業生には、愛媛大学の卒業生であることを誇りに思い、後輩のお手本となるような活躍してほしいです。そして、卒業生同士、お互い助け合い、支え合いながら、同時に愛媛大学医学部を支えていってほしいです。

### <三浦>

愛媛県で研修する学生の定着率は、少しずつ増えています。これからも、まずは愛校心を持って愛媛県で初期研修を始め、愛媛県で貢献してほしいです。

私は最近、日々の小さな努力、僅差の違いが一年後には大きな差になっていると感じるようになりました。今を1だと考えると、毎日1%の努力をした場合、翌日は1.01になり、それを毎日続けて365乗すると37.8になります。反対に、1%ずつ墮落すると、翌日は0.99になり、1年では0.026になるんです。もともと1あったものが、1%の努力と1%の墮落では1年でかなり大きい差になる。だから、日々少しずつでも努力してほしいと考えます。

### <高田>

卒業生には、愛媛大学卒業というゼッケンを背負ってこれから医療活動をしていくわけですから、いつまでも愛媛大学を思っていてほしいです。来年、日本渡航医学会という学会があります。その学会準備をしていると思わぬところに愛媛大学の卒業生がいることに気づきました。キューバの大使館で、外務省の医療機関に勤務する方が愛媛大学の卒業生だったのです。今回の学会では多に助けてくれています。このように母校愛のある卒業生から大事にされる大学であり続けてほしいと思います。

今後も大学経営の厳しさは変わらないので、同窓生からの金銭的なサポートについても具体的に募っていこうと考えています。次の75周年、100周年を、たくさんの方から祝福され、愛される大学になってほしいです。

### <薬師神>

愛媛という地域、そして愛媛大学に愛着を持ち、誇りをもって進んでほしいですね。先生方、本日はお忙しい中ありがとうございます。



同窓会新会長 薬師神芳洋



## 安川 正貴

(愛媛大学大学院医学系研究科 血液・免疫・感染症内科学 教授)

### 愛媛大学医学部での40年を顧みて

愛媛大学医学部同窓会の皆様、お元気でご活躍のことと存じます。血液・免疫・感染症内科学(第1内科)の安川正貴です。私は昭和52年、医学部卒業と同時に、開講間もない第1内科(小林 譲教授)に入局させていただきました。以来、国内・海外留学の3年間を除きこれまで一貫して愛媛大学医学部に所属し、先輩の諸先生方ならびに同窓会の皆様にご世話になっております。さて私も今年65歳になり、今年度で定年退職となりました。思い起こせばこの40年間、様々な出来事がありました。医師になってからの私の人生は愛媛大学医学部の歴史そのもののような気がいたします。

私は平成23年から27年まで医学系研究科長・医学部長を務めさせていただきました。その間、創立40周年を迎えることになり、記念式典を挙行いたしました。記念誌発刊のため、創立当時の様々な資料を収集しましたが、それらを拝見し、当時のことを大変懐かしく思い起こしました。無からの創造、初代教授たちはどのような夢を託して愛媛大学医学部の創設に臨まれたのでしょうか。当時の教授のお写真を拝見すると、皆さん、内に秘めた並々ならぬ意欲が感じられます。他方、歴史もなく先輩もいない学生諸君や私たち新米教員は、一抹の不安を抱きながらも、上からの束縛もなく自由奔放にやれていたように感じます。この点は新設医学部のメリットであったとも言えましょう。40周年記念事業では、第1～3期生による座談会「あの日、あの頃～すべてはここから始まった」を開催し、キャラの濃い6名の卒業生と一緒に医学部創世期の思い出を語り合いました。同窓会の皆様、今一度愛媛大学医学部40周年記念誌をご覧ください。懐かしい思い出話満載です。

愛媛大学医学部は創立44周年を迎え、新設医学部の名称はすでに死語となりました。歴史が浅いものだという言い訳はできなくなったという事でもあります。私は常々、国立大学はマラソンランナーのように競争的環境に置かれており、他大学との競争に勝てる大学のみが生き残れるのだと思っています。それでは愛媛大学医学部は今どのような順位に位置しているのでしょうか。私は平成24年12月、医学系研究科長・医学部長として文科省に出向き、愛媛大学医学部のこれまでの実績を示し、今後のミッションにつき意見交換いたしました。そこで文科省から頂いた「愛媛大学医学部は新設医学部の中で断トツの研究成果を挙げておられますね。」という言葉は今でも忘れることができません。ミッションの再定義では、いわゆる旧六、新八と呼ばれる歴史のある大学と肩を並べる評価が得られたことは、この40年で最も嬉しかったことの一つです。

初代教授が大変なご苦勞をされ退官された時期を黎明期の終焉とするならば、初代教授に可愛がっていただきながら医学部創立に関わった我々若手教員の退職は揺籃期の終わりとも言えます。今まさに愛媛大学は成長期・確立期となり、同窓会の皆様を中心となって益々大きく発展する時期を迎えています。愛媛大学医学部の益々の発展を心からお祈り申し上げ、同窓会の皆様へのメッセージとさせていただきます。



## 檜垣 實男

(愛媛大学大学院医学系研究科 循環器・呼吸器・腎高血圧内科学(第二内科)教授)  
愛媛県医師会理事

### 坂の上の雲を目指して

第二内科(循環器・呼吸器・腎高血圧内科学)教授の檜垣實男です。愛媛大学には2002年5月1日に着任し、来年2018年3月31日で退職の日を迎えます。思えば長い16年間があつという間に過ぎ去りました。愛媛は私のふるさとであり、前任地の大阪大学時代から高血圧分野における愛媛大学第二内科の素晴らしい業績や、愛媛大学出身で大阪で臨床研修を行っている若手医師達のレベルの高さは、私の誇りとするところでした。第二内科の教室着任時には、愛媛県内の医局員配置表を見て、ハイレベルの医師達の軍容に、これはうまくやれば天下をとれると身震いしたものです。ところが、新臨床研修制度のスタートで医療崩壊が始まり、入局者が激減。まるで地域医療崩壊の現場で撤退戦を続けているような時代となりました。しかし愛大卒業生を中心とする教員達は明朗活発。診療に時間を割かれながらも、大学はもちろんのこと各関連病院においても多くの研究業績を発表し続けました。

この間、行政、医師会、関連病院(私の病院長時代に連携病院と名称を改めさせていただきました)間の強い協力体制の確立が進み、愛媛県唯一の医育機関として、愛大医学部の存在感は強くなったと思います。愛媛大学医学部と附属病院がここまできたのは、精力的に任に当たってきた教員はじめ、高田清式前同窓会長の名マネジメントのもと、一丸となって愛媛県の医学の充実に尽力してきた同窓会のたまものと言って良いと思います。この場を借りて心からの感謝の気持ちを示すとともに、今後益々の繁栄を祈念しています。

私もいよいよ退職の日を迎えます。これまでの私の人生は、例えれば坂の上の雲をめざして山を上ってきたようなものです。私の山は人々から仰ぎ見られるような高峰ではありませんでしたが、楽しく爽り多く、幾多の生き物をはぐくむ事のできる豊かな山であつたように思います。私なら満足感を持って、これからは美しい景色を楽しみながら坂を下りてゆきたいと期待していますが、一方で、より激しさを増す医療環境下では隠居を楽しむような贅沢は許されそうもありません。健康長寿時代のベテラン医師として、世の中にご恩返し気持ちで生きてゆきたいと思います。同窓会の皆様には本当にお世話になりました。新たな峰を目指す第二内科同窓会を含めて、愛媛大学医学部同窓会員の皆様の益々のご多幸をお祈りいたします。



## 久門 良明

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域医療再生学 教授)

### 虫の目で俯瞰する

最近ではドローンによる映像がメディアに溢れています。先日のテレビでも、日本アルプス縦走で見える景色が地上カメラとドローンで併せて紹介されていました。地上カメラでは危険な足場や登山者の息遣いが、ドローンでは山の連なりの中の登山者が映し出され、俯瞰することの威力を感じさせられました。

「物事を見るときには、虫の目、鳥の目、魚の目で捉えることが大切である」と言われます。虫の目は目の前で起きている事象を詳細に観察する目、鳥の目は全体を見渡す目、魚の目は変化を察知する目であり、「木を見て森を見ず」では難局を乗り越えることが至難の業だからです。

脳卒中診療に例えると、以前の急性期病院では疾病の治療が全てであり、リハビリ以降は二の次でした。患者側も片麻痺や失語症などの後遺症があると、治療の継続を願って転院を躊躇いました。そのため、早期のリハビリ開始が機能回復のためには望ましいものの、転院が1ヶ月を超えることはよくありました。これを改善するため、国の方針により全国で脳卒中医療連携パスを介した急性期、回復期、維持期施設の連携体制の構築が進められました。各施設では医師、看護師、リハビリスタッフ、ソーシャルワーカーが連携し、医療連携室が窓口になって他施設と連絡網を形成しました。患者側には「転院＝切り捨て」との誤解がないように、入院時に診療全体の流れを説明し、転院の意味を理解して頂きました。その結果、リハビリ病院への転院が2週間前後と短縮されました。また、急性期病院は、リハビリ病院へ転院時には連携パスで患者情報を伝えますが、リハビリ病院の退院時には経過や今後の方針について連絡を受けるため、回復程度を知ることができました。定期会議の際にはリハビリ施設のスタッフとの意見交換により、お互い具体的内容を確認しました。当初は、医療財政や医療機関の事情で始まったものですが、連携病院のスタッフは最高の機能回復を目標に、脳卒中診療を俯瞰して各々の役割を果たせるようになりました。

疾病の治療は患者の予後に直結するため、臨床医は治療成績の向上に努める使命がありますが、これからの地域包括ケア時代には退院後の生活も見渡した治療計画を立てること、つまり俯瞰する力も必要です。このような物事の捉え方は難題の克服に際しても、目的を達成するための解決策を、感情に左右されることなく理性的に導き出してくれるでしょう。

## 医学祭を終えて

### 第41回愛媛大学医学祭実行委員長 国広 丞史



5月20、21日に第41回愛媛大学医学祭を開催させていただきました。今回の開催につきまして、多くの方々にご協力いただきましたこと厚く御礼申し上げます。

さて、愛媛大学医学祭も今年で第41回を迎えることとなりました。今年の医学祭テーマは「will」とさせていただきます。この言葉には「意志」と「未来」の二つの意味が込められています。この行事を通じて、これまでの先輩方が積み上げてこられた医学祭への意志を感じるとともに、未来の後輩たちにこの行事に込めた思いを引き継いでいけるような医学祭にしたいと思い、このテーマといたしました。

さて、医学祭当日は晴天にも恵まれ多くの方々にご来場いただき、各企画は大盛況となりました。講演会では、愛媛大学大学院医学系研究科 地域小児・周産期学講座 榎垣高史教授に「モンゴルの子どもたちが教えてくれたこと」をご講演していただきました。技術的、経済的にも医療が困難な状況のなかで、子どもの救命・治療のために一生懸命努力する医師やスタッフと、モンゴル国の子供たちの状況など、ご自身のモンゴルでの医療体験を中心に、HSPのプロジェクトについて分かりやすくご講演してくださいました。

その他、「THE BEAT GARDEN」、「モン吉」によるゲストライブをはじめ、各サークルによるバザーやフリーマーケットなど、多くの方々楽しんでいただけたのではないかと思います。看護体験ツアー、キャンパスツアーでは、将来医療に携わる可能性を秘めた学生たちの熱い眼差しを感じるとともに、ステージ企画では、軽音部の演奏や合気道部の演武など、各部活動の輝かしい姿を見ることができ、連日活況で賑わうこととなりました。

この医学祭全体を通して大きなトラブルもなく、無事に終了することができました。この行事を通して、人と人との繋がりを感じるとともに、皆で協力して一つの目標に向かうことの大切さを学ぶことのできた、非常に貴重な経験となりました。これからも医学祭が盛大に開催されますように、後輩たちをサポートしていけたらと思います。

最後になりましたが、第41回愛媛大学医学祭にご協力いただきました愛媛大学医学部の諸先輩方、教職員の方々、近隣の住民の方々、学生の皆様方に、実行委員会一同、心より感謝申し上げます。

# 海外医療研修に参加して

毎年同窓会では、海外医療研修に参加する医学科学生に資金援助をしています。今年も、参加した学生から研修レポートが届きました。

## ■ 三田村 祐里 (6年生)

(左から2番目)

私は2017年5月22日から6月2日の2週間、韓国の春川市にある江原大学病院の産婦人科と小児科で1週間ずつ臨床実習をさせて頂きました。

産婦人科では外来でのエコー見学や手術見学等をさせて頂き、小児科では2015年にあったMERSの流行を契機に作られた陰圧室やNICUなどを見学したり、講義も頂きました。実習を通してまず感じたことは韓国の国試は筆記だけでなく実技の試験もあるためか、実習で学生が挿管を行ったり、ルートを取ったりと手技を行う機会が日本より多いように感じました。代わりに日本では高性能でより本物に近いシュミレーターが充実していると感じました。どちらが良いかは難しいですが、両方をより組み合わせ実習を取り入れることができれば、より実践的で患者さんの負担の軽減にもつながるような医療人の育成が行えると思います。

また今回の留学では英語力不足に加えて、韓国語をほとんど勉強しなかったので、自分の思っていることを英語で相手に伝える事の難しさが2週間日本語が通じない状況で過ごした事であらためて身にしみました。韓国の学生は韓国語ではなく英語の教科書を使って普段から勉強しており、英語を使うことに慣れていました。私も普段医学を勉強していく中で、略語をそのまま覚えるのではなく英語で覚えるようにするなどして英語を少しずつでも身につけていこうと思いました。

韓国で過ごした2週間では、先生方、看護師さん、学生の皆さんに毎日本当に親切にして頂き、韓国の食、文化、観光など沢山の事を体験し、沢山の友達ができ、韓国が大好きになりました。これから先、日本と韓国がより良い関係になる為に少しでも貢献していきたいです。

今回海外で臨床実習を行うという貴重な機会を与えてくださり、支えて下さった先生方、国際化推進室の方々に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



## ■ 森 礼子 (6年生)

(前列右から4番目)

2017年5月、韓国の江原大学病院にて、産婦人科と小児科を1週間ずつ回らせていただきました。将来の志望として産婦人科と小児科を考えている私にとって、周産期医療に力を入れている江原大学病院での実習は、より広い視点を持つ絶好のチャンスだと思い、参加する運びとなりました。

2週間という短期間ながらも、各教授の回診や外来、手術への参加や、カンファレンス、講義など、私たちのために様々なプログラムを用意して下さり、温かく迎え入れてくださいました。韓国では日本と違い、母国語で医学を学ぶツールが非常に限られていて、全ての医師および学生は英語での学びを基本としており、その分最新のトピックに敏感であると感じました。

日本との相違点として印象的だったのは、韓国ではかつて男尊女卑があった時代の名残から、現在でも28週までは胎児の性別を伝えないということです。現在はそのような考えはほとんど無く、むしろ兵役のない女児の方が好まれる、とのことでした。また、病院全体の医師数が少ない分、手術や検査の際看護師や技師が医師の役割の一部を担っており、チームとしての強い信頼関係をみることができました。

自分の未熟な英語力のために、言いたいことをうまく伝えられないもどかしさはありませんでしたが、この留学で、産婦人科小児科領域は勿論、医療全体について、更に文化の違いについてなど多岐にわたって意見を交換し、考えを深めることができました。これから医師になるにあたって、日本の恵まれた環境に感謝しながらもそれに甘んじることなく、今回の経験を活かして、目の前の患者さんと世界の医療の両方に目を向けることができるよう努めたいと思っています。

最後になりましたが、将来について考える大事な時期に海外で実習をする貴重な機会を頂けたこと、大変嬉しく思います。そして、このプログラムの実現にあたりましてご支援、ご尽力くださった全ての方々に心より御礼申し上げます。



## ■ 岩下 晶穂 (4年生)

(右から3番目)

私はこの春、EHC (Exploring Health Care) プログラムに参加し、サンフランシスコへ2週間の短期留学に行きました。

サンフランシスコでは、アメリカの保険制度、医療教育システム、セクシャルマイノリティの方達への医療、臓器移植、ホスピスケアなどについて学び、多くのディスカッションをしました。どれも非常に興味深かったのですが、特にホスピスケアのレクチャーの一環でホスピスを訪れた時、ホスピスで人種、宗教、言語、経済状態など、異なるバックグラウンドを持つ人々が混在しているにも関わらず、それぞれが個々に尊重されている様子がとても印象的でした。

ディスカッションでは、日本ではあまり取り上げられないテーマということもありましたが、なかなか自分の意見を英語で正確に表現することが叶わず、高度な内容を扱う場では満足に議論に参加することすらできないのだと、英語を継続して勉強することの重要性を感じました。

また、臓器移植のボランティアをしている方の家に招かれ、そこでご主人とお話しする機会がありましたが、「日本国民はどの程度大統領選出に関われるのですか?」「日本では人口が減っていているけれど、どう考えていますか?」といった質問をされた時、学生たちが一斉に答えに詰まっている様子を見て、私たち若者こそが日本の政治や将来について問題意識を持って取り組んでいかなくてはならないことを痛感しました。

そして何より、全国の他大学の医学生達と交流したことで見聞を広められました、自分の今の勉強に対する姿勢や将来のキャリアについて考え直すよいきっかけとなりました。

アメリカでこれらの素晴らしい経験ができたのも、ひとえに皆様のご支援あってのことだと深く感謝しております。皆様のご協力、ご期待に一愛媛大学医学部生として応えられるよう、今後もより一層精進する決意であります。





## 21期生同期会 報告

平成29年6月10日土曜日に松山国際ホテルにて21期生の同窓会を行いました。東京や大阪など、遠方からの同窓生を含めて、35名が参加しました。前回の同窓会より10年以上経過しており、また、卒業以来18年ぶりに再会する同窓生も多く、懐かしい顔に会うことができました。最初は、みんな変わっているのではないかと考えたのですが、自分を含めてやや外形に丸みが出ている同窓生もいるものの、予想以上に学生の雰囲気のままであり、すぐに学生時代の思い出話で盛り上がりました。



同窓会では、参加者全員が卒業から今までの「自分史」をプレゼンしてもらい、現状を報告してもらいました。手術に没頭している同窓生や家庭と仕事を両立している同窓生など、それぞれがあらゆる分野で活躍している様子を垣間見ることができ楽しいひと時を過ごすことができました。次回は数年後行くと約束をし、お開きとなりました。愛媛大学医学部で学んだ仲間といい時間を共有できました。

(文責：鈴木 崇)

## 18期生同期会 報告

平成29年8月5日、松山全日空ホテルにて同窓会を開催しました。大型台風の接近が心配されましたが、交通機関の乱れもなく、総勢48名(県内:22名、県外:26名)が集まりました。会っていなかった21年の年月はあっという間に短縮され、あの頃の気持ちのままに会話が弾みました。



“卒後の歩み”プレゼンでは、仕事の話、家族の写真のほか、趣味やハマっていることを熱く語り、大いに盛り上がりました。力作ぞろいで、学生時代の懐かしい写真も出てきましたね。準備して下さった皆さん、ありがとうございました。

みんなそれぞれの人生を力強く歩んでいて、頼もしい限りです。三次会のあと、名残惜しさを感じつつ、再会を約束して解散しました。

次は卒業25周年記念同窓会です。今回残念ながら出席できなかった皆さんも、4年後ぜひ松山でお会いしましょう！

第18期卒業25周年記念同窓会：平成33年8月7日(土) 開催予定

(文責：手塚優子)

## 7期生同期会 報告

平成29年9月23日(土・秋分の日)、4回目の同窓会(昭和54年入学または昭和60年卒業の集まり)を3年ぶりに、関西・京都市(京都ホテルオークラ)にて開催致しました。遠方からのご参加も多いなか総勢41名の方々にお集まり頂きました。初めに先斗町の芸妓さん2名、舞妓さん2名、地方さん1名による祝舞(演目:白扇、祇園小唄鴨川小唄)の披露の後、野々村安啓さんによる開会の挨拶、宮田(岡田)能理子さんによる乾杯にて開宴しました。出席者一人一人には懐かしいお話や近況報告を交えたショートスピーチをして頂きました。30年ぶりに会う方々もおられるので幹事の発案で卒業アルバムの個人写真や寄せ書き集を同時にスライドにしてスクリーンに描写し大いに受けました。会の中では宮川(美濃)直子さんによる素敵なピアノ演奏、会の終わりには中野英二さん・堀内修三さんによるZUMBA(ラテン音楽を主に用いたフィットネスダンス)の余興もあり大盛り上がりでした。最後に全体記念写真撮影(添付ファイル)を行い、友岡俊夫さんによる閉会の挨拶で幕を閉じました。2次会は山村光一さん幹事のもと京都東山の夜景が一望できる17階のホテル内ラウンジでさらに親睦を図りました。



翌日9月24日(日)には、親睦ゴルフを名匠井上誠一氏設計の瀬田ゴルフコース(北コース)で開催、晴天のもと素晴らしいメンバーに恵まれ、とても楽しいラウンドができました。

次回開催は3年後有田孝司さんを中心に松山の地で執り行うことが決まり、健康に留意し元気で再会することを祈念しました。

幹事(関西支部7期生同窓生共同開催)：青木友和、宮田(岡田)能理子、奥野 博、友岡俊夫、野々村安啓、畑 雅之、山村光一

(文責 奥野 博)

## 第15回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会 報告

愛媛大学医学部卒業の関東在住の医師は約400名になりました。この度、年一度の愛媛大学医学部同窓会、第15回東日本支部総会が平成29年1月28日、15期生の幹事のもと、アルカディア市ヶ谷(東京)で開催されました。

愛媛大学医学部同窓会高田会長(3期生)から母校愛媛大学医学部の近況を詳細に報告頂きました。そして、愛媛大学医学部から初の国会議員になられた熊野参議院議員(12期生)より、国会活動の近況を報告頂き、また厚生省の関係の部会にも所属されるとのことで、今後の活躍がたいへん楽しみです。さらに最後には、第15回総会の主役である15期生の秋山教授(川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部長・教授)から、医療情報システムの展開の講演を頂きました。愛媛大学医学部の卒業生が色々な分野で活躍していることを改めて実感し、また、先輩や後輩との再会のひと時を楽しめました。

来年は第16回総会を行います。16期生の皆さん、宜しくお願い致します。

(文責 酒向正春)



## 第8回愛媛大学医学部同窓会中国支部総会 報告

愛媛大学医学部中国地区支部は、2年に一度広島と岡山が交互に総会を開催しております。今回は広島島の担当で、平成29年5月27日(土)にホテルグランヴィア広島で開催いたしました。今回は愛媛大学医学部臨床腫瘍学教授の葉師神芳洋教授(10期卒)をお招きし、「がんの治療と愛媛大学の今昔」と題して特別講演をしていただきました。先生が特に取り組まれている悪性リンパ腫の治療を中心に抗がん剤や分子標的治療薬の歴史の変遷から、患者さんの看取りに対する心構えまで幅広くお話しいただき、参加者全員の心に残るお話でした。後半は卒業年度ごとに近況報告をしていただき、和気あいあいの楽しい会となりました。今回は先生の同級生や、現在先生が野球部の顧問をされている野球部のOBを中心に41名の参加をいただき、盛会の内に執り行うことができました。総会終了後は皆さん2次会、3次会と流れて親交を温めていただくことができましたと思います。

また2年後にはさらにたくさんの方のご参加をお待ちしております。

(文責 西垣内啓二)



## 第14回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会 報告

皆さんお元気ですか。今年も愛媛大学医学部九州支部同窓会を7月22日ホテル日航福岡にて行いました。昨年の4月14日と16日に熊本と大分で震度7の地震が発生し、今年も九州北部豪雨があり、福岡県朝倉市から大分県にかけ多大な被害がありました。それでも、15名の出席があり、1期生から21期生まで福岡県を始め大分、山口、長崎、熊本より参加していただきました。(残念ながら鹿児島在住の教官をしていただきました佐野先生は都合により欠席)

今回の講演は、『外科の毀誉褒貶(きよほうへん)卒後38年 思い出に残る症例を振り返って』の演題で高橋広先生(1期生)にお願いしました。第二外科木村教授時代やご自身執刀の手術内容を説明していただき、繊細な先生の手術手技や患者さんのその後の経過など、外科医としての心構えが基盤にあり、技術習得の基礎がしっかり感じられる内容でした。現在は福岡市内の甲状腺専門の病院に勤務され、同窓会の親分的存在であります。

さらに野口病院院長に村上司先生(4期生)が院長就任されたとのことでした。

その後、写真撮影、懇親会となり近況報告も交えながら無事同窓会は終了し、ホテル内で二次会を行い来年の再会を誓いました。

次回は平成30年7月28日(場所 ホテル日航福岡)を予定しております。

九州在住や九州に赴任された先生がおられましたら一人でも多く出席していただけるようご理解ご協力お願いします(山口や沖縄も含む)。当事務局で九州在住を把握してます129名に葉書を出しましたが返事が43しかありませんでした。近況報告でもよろしいですから、小生か事務局の澄井先生まで連絡いただければ幸いです。

愛大の各医局の先生で九州出身の方の参加も歓迎します。また研修医で九州勤務の方も参加よろしく申し上げます。

<事務局> すみい婦人科クリニック 澄井 敬成(8期生) sumiic@k9.dion.ne.jp

九州支部長 角 典洋(2期生) sumi-clinic@mx2.tiki.ne.jp



# Ehime University School of Medicine

## Campus Map

愛媛大学医学部 キャンパスマップ



1 ビジネスホテル重信



2 セブンスター重信店



3 うどん茶屋 北斗 重信店



4 河内屋



6 ホスホテルパーク



7 医学部フードショップ MyDo!



8 談話室



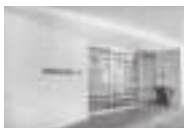
15 附属図書館



16 医学部本館



17 コミュニティハウス



18 地域医療支援センター



9 売店  
〔コンビニエンスあいあい〕



10 レストラン「愛彩館」



11 患者図書館  
「ひだまりの里」



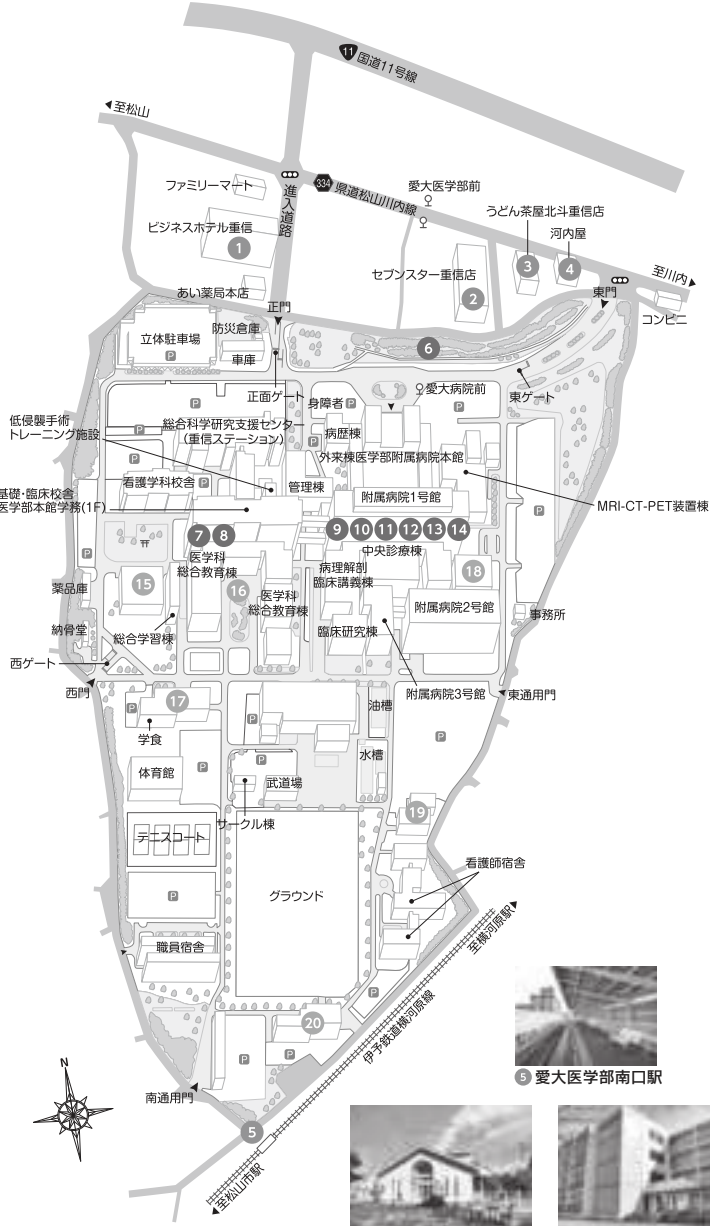
12 タリーズコーヒー  
愛媛大学病院店



13 郵便局



14 ATM コーナー



5 愛大医学部南口駅



19 あいあいキッズ  
(院内保育所)



20 学生・研修医宿舎  
(あいレジアンズ)

- キャンパス外
- 1 2 3 4 5

- ショップ他
- 6 7 8 9 10 11
- 12 13 14

- 施設
- 15 16 17 18 19 20

### 愛媛大学医学部支援基金について

昨年同封しお願いいたしました、教育環境の充実のための医学部支援基金寄付金に多くのご支援をいただき有難うございました。継続した支援寄付金であり、引き続きこれからも何卒宜しくお願い申し上げます。

# 《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・同窓会名簿の作成
- ・定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・同窓会会費徴収のための業務
- ・事務連絡及び各種文書の送付
- ・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

## 2. 個人情報の提供

会員から情報の紹介依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承下さい。

## 3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

## 《次号会報原稿募集》

### ★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 20名以上の参加
  2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
  3. 会費未納者への納入勧誘
  4. 3年に1回

### ★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

## 《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644

入会金 1万円 終身会費 4万円(合計5万円)

## 《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

## 《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

## お知らせ

### 第34回

### 愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：平成30年5月18日(金) 18時～

場所：臨床第2講義室

議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

## 連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

### 愛媛大学医学部同窓会事務局

TEL：089-960-5989 (受付10時～15時)

FAX：089-960-5989

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp

HP：http://www.m.ehime-u.ac.jp/dosokai/igaku/